

71 日本の漆器とフランスの金細工のマリアージュ（2021年7月8日）

パリの装飾芸術美術館で開催中の「luxes」展で、日本の漆器が展示されていることを以前にご紹介しました

(<https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100158242.pdf>)。この中でもご紹介したリキュールセットは、17世紀半ばにヨーロッパ向けの輸出用として日本で作られた漆器のケースの中に、18世紀半ばに水晶と金を使ってパリで作られたグラスや小瓶などが収められています。これを見たときに、日本とフランスの匠の技の合作に驚きと感動を覚えました。日本では、このような漆器を見たことがありませんでしたので関心を持って調べてみました。実はこれは、ジュール・マザラン枢機卿（1602-1661）が所有していたものです。マザランは、ローマ教皇庁の後、ルイ13世とルイ14世の下で活動した政治家で、ルイ14世が幼い頃から教育係を務め、実質的に宰相を担いました。マザランは、漆器のコレクターでもありました。国王に近い人物が漆器を熱心に集めていたことから、当時のヨーロッパの上流社会で漆器がいかに珍重されていたかが分かります。



ラグビーボールのような形をした入れ物は、リキュールセットと同じ時期に日仏合作で作られたもので、香りを楽しむための道具（ポプリ）です。黒地に金で描かれた植物の図柄と金色のブロンズで作られた花をモチーフとした足台が、見事に融合しています。

漆器とは、ウルシの木の樹液である漆を木や紙に塗り重ねて作る工芸品です。日本を含む東アジアや東南アジアでは、古くから漆器が作られてきました。漆には、接着剤や塗料としての役割があります。防虫や防水の効果がある漆を重ね塗りして作られる漆器は、軽くて丈夫であることから、食器や家具として使われてきました。

パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

ヨーロッパにはウルシがなかったことから、16世紀末頃から、東洋で作られた漆器がヨーロッパへ輸入されました。展示されているリキュールセットのケースやポプリは日本で作られたものですが、海を渡って注文主が待つヨーロッパへ届けられたことから、日本であまり目にすることがありません。これらの作品は、当時のフランス人が、日本の職人にヨーロッパ仕様の漆器を作らせた上に、フランスの職人が金細工を施してさらに豪華に作り上げたものです。このように贅沢な品々は、この時代のフランス上流社会の人々にとって権力を表すものとして用いられたものかもしれませんが、私は当時のフランス人の美しさや豪華さに対する探求心の強さに脱帽しました。

パリ装飾芸術美術館「luxe」展（2021年7月18日まで）

<https://madparis.fr/en/about-us/exhibitions/current-exhibitions/musee-des-arts-decoratifs/luxes-en/>